令和五年度生　徳島歯科学院専門学校

入学試験問題

国語

受験番号

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

大正六〜八年刊の岩波版『漱石全集』と大正十三年刊のアルス版『子規全集』の入手はたやすかったが、あかるいブルーの地に鶴を白ぬきした昭和三年刊の新潮版『蘆花全集』は手に入れにくかった。

やっと手に入れたとき、亡父の体臭をカいだような思いがした。しかしせっかくの『蘆花全集』もひらく気がせず、再読したのは『謀叛論』だけで、なにかの形見のように書架にねむらせてしまっている。

それにひきかえて『子規全集』は折りにふれて読むようになった。とくに、昭和五十年ごろから刊行されはじめた講談社版『子規全集』の編集にカンヨしてからは、この版のほうがなじみぶかくなった。読むべき本がないまま、そぞろにすごしている日は、テレビでも見る程度の気分で、自分のいまの齢よりもはるかに若くして死んだこのひとの散文を読んだりする。子規には、どこかひとをあかるくさせるとびきり上質な［A］がある。あるいは体温そのものを感じさせるユーモアがあって、元気がわいてくるのである。

子規は、ときにこちらの大人くささが厭になるほどに子供っぽい。かれ自身、むきであるため、読んでいて、そのことに批判的になるよりも、愛を感じてしまう以外、手がない。

たとえば、かれの写実的文章論への提起の問題である。つまりは、無内容な美文はいけない、という。写生でなければいけない。しかしながら単なる写生では平板だという。そこで、ヤマがなければいけないとするのだが、子規の場合、それだけでとどまらない。

秉公とよんでいる同郷の河東碧梧桐や、おなじく清サンとよんでいる高浜虚子らを根岸の病室にあつめ、文章を持ちよらせてロウドクさせ、品評し、いいものは雑誌「ホトヽギス」にのせた。脊髄も骨盤も片肺も腐りはじめた死の二年前の九月ごろのことである。その会を、子規はことさら自分の主唱に即して、

「山会」

と名づけた。その命名に、主唱者のむきさ加減が稚気になってあらわれている。子規という中年書生に、歳若の書生がとりまき、とくに松山組にいたっては、子規を通称の昇――ノボサン――とよんで、兄貴株あつかいをしているふんいきのなかから、素朴リアリズムによる文章改革運動がはじめられ、同時代に大きな影響をあたえた。

蘆花、漱石、子規の三人は、明治元年（一八六八年）うまれの蘆花だけが一つ歳下で、ほぼ同年のうまれである。蘆花と子規の文章は、その前期においては多分に美文的であったが、後期にはともに写実性が高くなった。ただ蘆花は後期になっても、修辞性がつよかった。このことは蘆花が固有にもつ酒精分のつよい資質――たとえば抑鬱気味の感情や、正義意識、さらには宗教的感情――と無縁ではないが、子規は修辞という言いまわしの多用を好まず、対象を青眼で見つめ、酒精分を排し、水のような態度で、それらの関係位置や成分を見きわめようとした。蘆花の作品が古び、子規の散文がいまなお気楽に読めて古びないのは、多分そのことによる。

以下の子規の明治三十四年の『墨汁一滴』のひとくだりは、右のことを実証するための例としてではなく、［B］としてあげる。

この例は、子規が、世情や物事について驚きを感ずるについても、無用の正義意識や修辞意識という精神の酒精分を排しているということのささやかなるしるしになるかもしれない。

五月二十八日付の『墨汁一滴』において、子規は都鄙の一側面にふれている。東京の子供は、田舎の子供とちがい、小学校の高等科の子でも、半紙で帳面をとじることができない。しかし東京の子供は田舎の子供にくらべ見聞のひろいことは非常なものである、とする。

「これは子供の事ではないが」

と、子規はいう。かれが田舎から出てきて驚いたことの一つは、東京の女がみずから包丁をとって魚の料理ができないということであった。子規はその理由を知っている。それらは魚屋がやるため、その技術を身につけずにすむからだ、という。

百事それ〴〵の機関が備つて居て、田舎のやうに一人で何も彼もやるといふ仕組で無いのも其一原因であらう。

その翌二十九日付でも、一教師からきいた話として、同主題の文章をかかげている。体操唱歌は［I］の子供にこれを好む傾きがあり、［II］の子供は男女にかぎらず、この課目をいやがる、という。そのことは、以下のこととも関係がある。

東京の子は活潑でおてんばで陽気な事を好み田舎の子は陰気でおとなしくてはでな事をはづかしがると云ふ反対の性質が（註・体操唱歌についての両者の好悪において）既に萌芽を発して居る。かう云ふ風であるから大人に成つて後 Ⅲ の者は愛嬌があつてつき合ひ易くて何事にもさかしく気がきいて居るのに反して Ⅳ の者は甚だんくさいけれどもしかし国家の大事とか一世の大事業と云ふ事になると却つて Ⅴ の者に先鞭をつけられ Ⅵ ツ子はむなしく其後塵を望む事が多い。一得一失。

その翌三十日付には、子規はいう。

……これも四十位になる東京の女に余が筍の話をしたら其の女は驚いて、筍が竹になるのですかと不思議さうに云ふてゐた。

（中略）

余が漱石と共に高等中学に居た頃漱石の内をおとづれた。漱石の内は牛込の喜久井町で田圃から一丁か二丁しかへだゝつてゐない処である。漱石は子供の時からそこに成長したのだ。余は漱石と二人田圃を散歩して早稲田から関口の方へい（つ）たが方六月頃であつたらう、そこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいで居るのは誠に善い心持であつた。此時余が驚いた事は、漱石は、我々が平生喰ふ所の米は此苗の実である事を知らなかつたといふ事である。都人士の菽麦を弁ぜざる事は往々此の類である。若し都の人が一匹の人間にならうと云ふのはどうしても一度は鄙住居をせねばならぬ。

この逸話は漱石を知る上でもおもしろいが、しかしそういうことよりも、以上のように、べつに雑報欄の珍事でもなく、天下の一大事でもない日常茶飯の随想が、硬質な新聞として知られる陸羯南の「日本」に、百六十四回連載されたということである。高調子や思い入れをこめた文体は他の欄に満載されているが、「規」という署名だけのこの欄では、呼吸の温かみのあるふだんの声で、しかもただの世事や、ほのかな心境が語られている。子規の『墨汁一滴』こそ、かれ自身の文体のヘンレキのすえ創始された文体といってよく、しかも子規は、横丁で遊ぶ子供のように、仲間をあつめてその共有化のためにささやかな文章改革運動をさえおこした。

山会は、子規の死後も、虚子編集の雑誌「ホトヽギス」において継続された。子規死後二年、漱石はこの山会のためはじめて創作の筆をとった。明治三十八年一月号から連載された『 C 』である。山会の延長線上でとらえるべきかもしれない。

（司馬遼太郎「言語についての感想」）

注　菽麦を弁ぜざる事……豆と麦との区別を知らないこと。

問一　傍線部a～hの片仮名は漢字に改め、漢字は読み方を平仮名で記せ。

問二　空欄 A ・ B に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

A
1　弱々しさ　2　豪快さ　3　哀れさ　4　幼稚さ　5　上品さ

B
1　一興趣　2　一刹那　3　一家言　4　一匹狼　5　一大事

問三　傍線部ア「自分の主唱」とは、何か。本文中からそのまま抜き出して記せ（十一字以内、句読点含まない）。

問四　傍線部イ「素朴リアリズムによる文章改革運動」とは、何か。それを具体的に記した個所を、本文中よりそのまま抜き出し（七十字以内、句読点含む）、その初めと終わりの五文字で記せ（句読点含まない）。

問五　傍線部ウ「対象を青眼で見つめ」とはどうすることか。その説明として最も適当なものを、次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　対象を自分の好みに応じて見ること。
2　対象を細かく調査してから見ること。
3　対象を好意的なまなざしで見つめること。
4　対象と距離を置いて眺めること。
5　対象を精一杯褒め称えて見ること。

問六　空欄 I ～ VI に、「東京」「田舎」のいずれかを入れて、本文を完成させよ。

問七　傍線部エ「呼吸の温かみのあるふだんの声で、しかもただの世事や、ほのかな心境が語られている」とあるが、それは「翌三十日付」本文のどの個所か。本文中から二文をそのまま抜き出し、各文の最初五文字（句読点含まない）を記せ。

問八　空欄『　C　』に入れるのに最も適当な作品名を、次の1～5の中から一つ選び、番号で答えよ。

1　舞姫　　2　暗夜行路　　3　自然と人生　　4　羅生門　　5　吾輩は猫である

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

このころには豊臣秀吉の身辺にもしだいに老いがせまっていた。ときのながれが感ぜられるような知らせがつづいた。

かつて織田信長にたいして恐ろしいまでのトウシを示した足利昌山（義昭）も、慶長二年（一五九七）八月二十八日に大坂で死んだ。かれは秀吉の被護をうけることになってから、天正十六年（一五八八）正月に出家し、三后に准ぜられた。そして文禄元年（一五九二）三月には、秀吉とともに名護屋にも出陣したが、それがかなり身体にこたえたとみえる。最後まで側近をはなれなかった遺臣真木島昭光らが京都の等持院に葬った。行年六十一歳であった。かれの机上作戦はずいぶん大きな波紋をえがいたものであったが、それでも直感力はなかなか鋭かった。毛利氏をたよったのも、当時の大勢としてもっとも安全なのがれ道であったといえよう。戦国乱離の渦中にあって、ともかくも最後まで前将軍の体面をたもって生をまっとうしたかれは、どこか A なところがあったのだと思う。

足利昌山といえば、その面倒をよくみた権中納言従三位小早川隆景も、少し早く六月十二日に三原で死んだ。すでに世を去った吉川元春とならんで毛利家の柱石であったが、とくに秀吉との間は高松城の講和以来、一度も相互に信頼を裏切られることがなかった。秀吉としては朝鮮の役中も隆景に期待するところが大きかっただけに、その訃報につよいショウゲキをうけたであろう。

こうした人々の訃をきくにつけても、秀吉の人生はなお、 I の感をまぬがれなかった。果たして秀次を殺して秀頼のアンタイをはかりえたかというと、けっしてそうは言いきれなかった。秀吉は秀頼のために、前田利家をその傅とし、越中新川郡を加増したうえ、秀次の邸第をあたえた。秀吉の心の不安は、けっきょく秀吉自身が信長の遺児や嫡孫をどう扱ってきたかという深い悔悟のなかから生まれるものであったはずで、ついに絶ちきることのできない性質のものであった。秀吉は、自分の死後についてよほど不吉な予感をもったようである。 II とはいいながら、一人の子への愛のゆえに、末期におよんで、かれはついにだれをも信ずることができなくなっていたのである。

かれはそうした精神の負担をふりすてるように、醍醐に豪華な花見をこころみた。それはその B 意味においては、かつての北野大茶湯に対比されるのがふつうであるが、その内容にはかれにみるような社会性もなければ解放性もなくなっていた。醍醐の花見の舞台裏をのぞいてみると、そのいかめしい警固に眼をみはらざるをえないのである。

「此の花と申すは、上の醍醐より下の醍醐のあひだにこれあり。五十町四方山々、廿三ところ御警固をかせられ、申すにおよばず弓・鎗・鉄砲等の兵具、その手〳〵の前をうちまはし、伏見より下の醍醐まで、御小姓衆・御馬廻警固なり。醍醐惣構には柵・もかり、幾重もこれあり」

〔醍醐寺三宝院の花見と申すのは、上の醍醐から下の醍醐まで桜を多数移植してあり、五キロ四方の野山に、二十三個所に警備の者を配置し、弓・鎗・鉄砲をもって守らせ、伏見から下の醍醐までは、小姓や馬廻り衆が厳重な警戒態勢を取っている。醍醐の惣構には柵や垣根などが幾重にも張り巡らされている。〕

といった状況である。『太閤さま軍記のうち』は、むしろサンビのつもりで書いたかもしれないが、弓・鎗・鉄砲をはりめぐらして厳戒裡に行なわれた花見は、惣構のうち「これより奥へは一切御用人のほかは、出入これなし」というまったくの非公開である。そこに北野大茶湯と醍醐花見の根本的なちがいがあった。それは ア 秀吉の姿であった。

しかも秀吉は、この花見にたいへんな力の入れようであった。前年の慶長二年（一五九七）三月、秀吉は山城醍醐寺三宝院に徳川家康以下の諸大名をともない、門跡義演らもこれに陪してさかんに花を賞した。この喜びを再現するため、翌三年三月十五日を期して一代の豪華な花見をこころみたのである。それに先立って、秀吉は両度にわたって三宝院に出向き、五重塔婆その他の修理をなし、みずから七百本の植樹を行なった。当日は最愛の秀頼をともない、北政所・西丸殿（淀君）・松丸殿・三丸殿（織田氏）・加賀殿（前田摩阿）などの妻妾をつらねて、山内に設けられた八つの御茶屋をつぎつぎにめぐるのであった。道の両側に趣向をこらした店棚が設けられて買い歩きを楽しんだ。こうした園遊は、秀吉のもっとも好んだところで、名護屋の陣中においてもこころみて、陣中の憂さを晴らしたことはよく知られている。

しかし弓・鉄砲で厳戒された花見は、 イ であったといわねばならない。醍醐の普請にはよほど関心をも

ったとみえて、四月十二日に秀吉はもう一度青葉となった醍醐を訪れた。

その年六月十七日、秀吉はある人の病を問うたが、そのなかにあわせて自身の病状の募ったことを書いた。同月二十七日、朝廷では臨時御神楽を奏して秀吉の平癒を祈った。同じ日、相国寺の承兌は上杉景勝に、秀吉の病状と加藤清正が朝鮮との和睦を扱うことを報じた。七月になると各地の寺社で平癒祈願が行なわれた。

七月十五日、秀吉は諸大名にたいして子秀頼に忠節を誓わせた。諸大名は利家の伏見の亭において誓書を家康および利家にさしだした。

八月五日には、家康・利家と長束正家・石田三成・増田長盛・浅野長政・前田玄以の五奉行とのあいだに誓書を交換した。

秀吉もすでに死期のせまるのを感じて、この日、五大老を召してふかく秀頼を委託した。有名な遺書である。

「返々秀より事たのみ申候、五人のしゆたのみ申へく候、いさい五人の物に申わたし候、なこりおしく候、以上、秀より事なりたち候やうに、此かきつけ候、しゆとしてたのみ申し候、なに事も此ほかにわ、おもひのこす事なく候、かしく」

くれぐれも、秀頼のことをお頼み申します。五人の方々にお頼み申すようにと、五奉行にも申し渡してあります。なごりおしくおもいます。秀頼がなりたっていけるようにと、この書き付けの衆に対してお頼み申しておきます。何事も、このほかには思い残すこともありません、かしく

八月五日　（太閤花押）

いへやす　〔徳川〕家康〕
ちくせん　〔前田〕利家〕
てるもと　〔毛利〕輝元〕
かけかつ　〔上杉〕景勝〕
秀いへ　〔宇喜多〕秀家〕

まいる」

「なごりおしく候」の一句が、余韻をもって三百余年の後世にまでひびくようである。しかし秀吉はなおも心が安まらなかった。七日には浅野長政ら五奉行に姻戚の縁をむすばせて、軋轢のないようにはかり、八日にはまたも家康・利家・宇喜多秀家らが誓書を書いた。もう夢にも現にも秀頼のことばかり、十日には精神朦朧としてきた。

そしてついに十八日、太政大臣従一位豊臣秀吉は六十二歳をもって世を去った。辞世はつぎの一句であった。

つゆとをちつゆときへにしわかみかな　なにわのことはゆめのまたゆめ

〔我身は、露のように落ち露のように消えていくもの、浪花（大坂）のはなやかさも、夢のまた夢のように〕

（林屋辰三郎氏の文章による）

注1　足利昌山（義昭）……室町幕府15代将軍。光秀の仲介により信長の助力を得る。しかし、その後は信長と対立して京を追放される。

2　三后……太皇太后・皇太后・皇后の総称。平安時代以来、年官・年爵を給し、その所得とした。

3　秀次……豊臣秀吉の養子。母は秀吉の姉。一五九一年秀吉の養子となり、関白左大臣に進んだが、秀頼が生まれて、秀吉と不和となる。のち高野山に追放され、ついで自殺させられた。

4　秀頼……豊臣秀吉の次子。母は淀君。長子の鶴丸は一五九一年に三歳で死んでおり、名実ともに秀吉の世嗣。この年（一五九八年）六歳。

5　傅……守り役。

6　醍醐……醍醐寺。平安前期（八七四）、空海の弟子聖宝が京都に創建した真言宗寺院。醍醐天皇の帰依を受けて栄えた。寺内では三宝院と報恩院が栄え、三宝院からは満済が出て、足利義持・義教の尊信を受けた。応仁の乱に伽藍焼、豊臣秀吉が再興。

7　北野大茶湯……一五八七年、豊臣秀吉が京都北野の松原で行った茶会。身分貧富の別なく茶湯の好きな者は参加でき、空前の大茶会であった。

8　小姓衆……小姓は、武家で主人の側近に仕え雑用を務める者。馬廻は、主君の馬のまわりにつき護衛する親衛隊。

問一　傍線部a～hの片仮名は漢字に改め、漢字は読み方を平仮名で記せ。

問二　空欄 A ・ B に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

A　1　軽薄　　2　凡庸　　3　嘘(うそ)つき　　4　非凡　　5　ものしり

B　1　宿命的　　2　表面的　　3　歴史的　　4　宗教的　　5　一般的

問二　空欄Ⅰ・Ⅱに入れるのに最も適当な語句を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

1　愛は盲目　　2　五十歩百歩　　3　坊主憎けりゃ袈裟まで憎い

4　日暮れて道遠し　　5　人生至る所に青山あり

問四　空欄ア・イに入れるのに最も適当な文を、それぞれ次の1～5の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア

1　園遊を滞りなく行いたいと願う

2　民衆に桜の花を手折らせまいと苦心する

3　もはや民衆を信用できなくなった

4　願わくは民衆にけがの無きようにと配慮する

5　民衆に自らの権威を誇示したいとする

イ

1　慎ましやかな花見

2　心むなしい豪遊

3　威風堂々とした盛儀

4　戦意昂(こう)揚のイベント

5　前年の醍醐寺花見の見事な再現

問五　波線部「「なこりおしく候」の一句が、余韻をもって三百余年の後世にまでひびく」とあるが、

①　「なこりおしく候」の「なこりおしく」を漢字で記せ。

②　「なこりおしく候」の一句が、余韻をもって三百余年の後世にまでひびく」のは、なぜか。その最も主要な要因と考えられるものを、次の1～7の中から二つ選び、番号で答えよ。

1　醍醐寺での一代の豪華な花見　　2　足利昌山（義昭）や小早川隆景の訃報　　3　秀頼の将来が心配

4　北野大茶湯の盛儀　　5　秀吉自身の迫る死期　　6　養子秀次を自殺させたこと

7　秀吉自身の精神朦朧

正解

一 問一 a-嗅（いだ） b-関与 c-朗読 d-せきずい e-よくうつ
f-こうお g-にちじょうさはん h-遍歴 2点×8＝16点

問二 A-4 B-1 4点×2＝8点

問三 ア ヤマがなければいけない 4点

問四 イ 初め- 無内容な美 終わり-ないとする
初め- かれの写実 終わり-では平板だ
初め- 写実的文章 終わり-板だという 6点

問五 ウ-3

問六 I-東京 II-田舎 III-東京 IV-田舎 V-田舎 VI-東京 2点×6＝12点

問七 エ 此時余が驚 1文は、この文に限る
都人士の菽 （若し都の人） 他の1文は、上のいずれかであれば可。 3点×2＝6点

問八 C-5 4点

二 問一 a-闘志 b-ふほう c-衝撃 d-安泰 e-かいご
f-讃美 g-う（さ） h-わぼく 1点×8＝8点

問二 A-4 B-3 4点×2＝8点

問三 I-4 II-1 4点×2＝8点

問四 ア-3 イ-2 4点×2＝8点

問五 ① 名残惜しく 3点
② 3、5 3点×2＝6点